

# 平成17年度 旭川中流域現地見学会 報告書

旭川舟運の中間地として栄えた  
建部の歴史・文化を体験しよう



平成17年11月29日（火）実施

旭川流域懇談会

## 1. 概要

### 「旭川舟運の中間地として栄えた 建部の歴史・文化を体験しよう」

をテーマに『旭川中流域現地見学会』を行いました。

#### 要 旨

平成17年11月29日(火)、旭川中流域の現地見学会を旭川流域懇談会の行事として、懇談会の委員の方や日ごろから川に興味を持つ学生の方4名及び、地元の方2名を講師として参加頂き開催しました。

今回の見学会は、今後の旭川の整備・維持管理を考える上で、旭川の認識を深める活動の一環とするもので、建部町の川にまつわる歴史・文化・自然などを地域の方の話を聞きながら見学するとともに、旭川が人々の暮らしとどのように関わってきたかを感じながら、川に対する想いについて語り合う場として実施しました。

#### 参加者

旭川流域懇談会委員	:5名
一般参加者(学生)	:4名
地元の方(講師)	:2名
国土交通省岡山河川事務所	:6名
その他	:5名
計	:22名

#### 見学箇所

高瀬舟発着場跡(大手ノ市)  
古い町並み(中田地区)  
宮地神社の水害記念塔  
建部井堰  
潜水橋(幸福橋)  
昼食後の自由時間にやはたの里を見学しました。



## 2. 行程

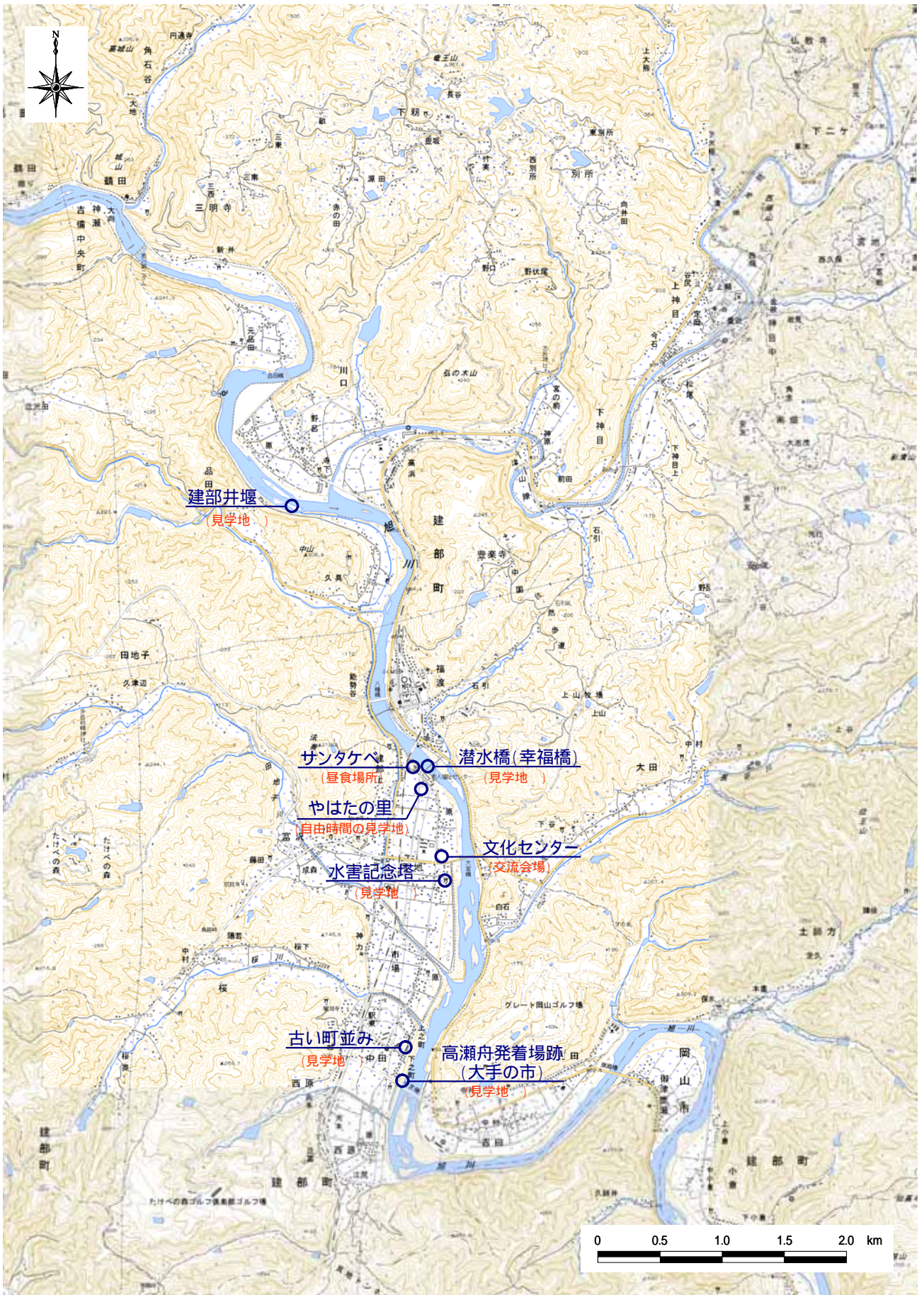
### 見学会

日時	場所	概要	備考
9:00	岡山大学(集合・出発)	車中にて事前説明 見学会の目的・予定等 参加者紹介 建部町作成「旭川物語」ビデオ鑑賞 (付属資料参照) 金川の紹介	事務局
9:40	建部町	到着	
9:50~10:10 (20分間)	高瀬舟発着場跡 (大手の市)	高瀬舟の発着場を見学 地元の方による現地紹介	神原氏
移動(徒歩10分)			
10:20~10:40 (20分間)	古い町並み(中田地区)	中田地区の町並みを見学 地元の方による現地紹介	神原氏
移動(バス+徒歩15分)			
10:55~11:15 (20分間)	宮地神社の水害記念塔	水害記念塔を見学 地元の方による現地紹介	神原氏
移動(徒歩+バス15分)			
11:30~11:50 (20分間)	建部井堰	建部井堰を見学 地元の方による現地紹介	神原氏
移動(バス10分)			
12:00~12:20 (20分間)	潜水橋	国道側から潜水橋を渡り、サンタケ べへ移動 地元の方による現地紹介	神原氏
12:20~13:30	サンタケベ	昼食	めだかの学校等の見学
移動(バス5分)			
13:30~15:30	交流会	文化センターで交流会を開催	交流会の内容は下記参照
15:40	建部町	出発	
16:30	岡山大学(到着・解散)		

### 交流会

日時	場所	概要	備考
13:30~15:30	交流会 (文化センター)	歴史をテーマ	元建部町立図書館館長 神原氏に話題提供していただき ます。
		災害をテーマ	
		自然をテーマ	AR-NET 中流域世話人 宮内氏に話題提供していただき ます。

### 3. 見学箇所図



## 4 . 実施結果 (概要)

### 出 発

- 当日は、岡山大学を集合場所として、建部町へ出発し、バスの車中で、上橋調査設計課長による挨拶、見学会の目的、予定の説明、参加者の紹介に続き、見学地先である建部町の紹介ビデオを鑑賞した。途中、バスで通過する御津町の歴史・文化についての紹介を加え、約40分かけて建部町へと到着した。

### 見学地 : 高瀬舟発着場跡 (大手ノ市)

- 地元の方、神原さんを講師として、見学地付近の堤防上にて、建部町における高瀬舟の歴史・船着き場・波止めなどの説明をしていただいた。
- その後、高瀬舟発着場跡の遺構を見学。
- さらに、地元の方、山元さんにご協力を頂き、川舟づくりの作業場を見学させていただいた。多くの取材や大学の研究者も訪れ、「世界最小、唯一の“造船所”」として紹介される作業場を見学して、旭川の河川交通の歴史について想いを寄せた。



### 見学地 : 古い町並み (中田地区)

- 岡山藩主家老の池田氏がこの建部の地に造った陣屋町の面影を感じることができる町並みを見学。
- 現在、残る町家が、明治期のものであることを神原さんからの話で知り、文献のみでは、知ることのできない貴重な話を聞くことができた。



### 見学地 : 宮地神社の水害記念塔

- 昭和9年の水害の浸水線が刻まれた、県下でもめずらしい水害記念塔を見学し、過去に起こった水害の体験談を聞いた。
- 水害の記録など文献だけでなく、生の実体験の話を聞くことができ、貴重な時間を過ごすことができた。



### 見学地 : 建部井堰

- 建部町のまちを潤す、取水堰を見学。井堰は国境を堰くため、川の中央まで斜めにせざるを得ない構造をしており、寛文時代に造られた、昔の人々の知恵を感じることができた。
- 参加者の多くがこの大規模な昔の堰にいろいろな想いを感じることができた。



### 見学地 : 潜水橋 (幸福橋)

- 川に一番近い場所から、高瀬舟・水害の話を聞くことができ、川と人との関わりを感じることができた。



### 自由時間 : めだかの学校

- サンタケベでの昼食後の自由時間に、めだかの学校を見学。旭川中流域に生息する川魚を見学し、美しい川を知ることができた。



## 交流会（建部町文化センター「法寿庵」）

- 午後からは、神原さんに加え、地元の宮内さんを講師として、「歴史」「災害」「自然」などについてお話しを伺い、参加者同士が川への思いを語り合った。
- 和やかな雰囲気の中、川を眺めながら充実した交流会が実施された。



## 意見・感想

川を中心とした町の歴史や文化を見学し、いつもと違う視点からいろんなことが発見でき、大変勉強になった。

町の歴史などを説明していただき、建部町の町の雰囲気を感じることができた。

普段、下流域で見る旭川のイメージが強かったが、建部町で中流域のきれいな川を見て、旭川の違った一面を見ることができた。

「豊かな」生活をされている印象を受けた。そのおかげで魅力的な話ができるのだと思う。机上の空論ではなく、地場に根差した話を聞くことができた。

人工的にできた陣屋町が印象的だった。人工的に突如できた町は権力がなくなるとすぐに廃れてしまうというあり方を印象的に感じた。

古い時代の堰が残っているということを知らなかった。今日は発見が多かった

町に流れる水路は、水がすごくきれいであるという印象だった。堰を見学して、ここから取水した水が町の中全体に流れているのだと気がついた。

町と川、あるいは町と水と人进行を考えると、町の中にきれいな水が流れているというのは、非常にいいことだと思う。豊かな感性が育つには重要なことである。

建部町を見ていると、川あるいは水に関してまったく問題がないような気がした。ある程度大きな町では、コンクリート護岸・堤防への植栽・水質などの問題がある。今後、人口集中した都市での川と人の関わりをどうすればよいのかということを考えて。

見学会を通じて、建部町の魅力を感じた。水・川を通じて、いろんな生活が時代とともに、人と関わりがあったということを実感できた。

川や自然を守ろうという働きが若い人にも伝わって、みんなで守っていけたらと思った。

交流会は見晴らしもよく、川のそばで一番適した場所での輪になっての話、非常にいいことだと感じた。

最も興味深かったのは、建部井堰であった。重機などが無い時代に、あれだけのものを人力だけで造りあげる昔の人の知恵というのはすごいものであると感じた。

現代では、いろんなものをねじ伏せようとする発想が強くなるのではないと思う。昔は、ねじ伏せるのではなく、その中でうまく、折り合いをつけて利用するという発想でやってきていたのではないか。非常に今日は楽しい一日であった。

## 5 . 実施結果のまとめ（総括）

### 5 1 . 見学会

旭川中流域見学会は、晴天の中、旭川流域懇談会委員5名(宇佐美委員、内田委員、田中委員、名合委員、久野委員)、地元の現地講師2名(神原さん、宮内さん)、一般参加者4名(学生)、岡山河川事務所(浦上事務所長を含む6名)の参加により実施され、事故もなく無事終了することができた。

今回の見学会は、今後の旭川の整備・維持管理を考える上で、旭川の認識を深める活動の一環とするもので、建部町の川にまつわる歴史・文化・自然などを地域の方の話を聞きながら見学するとともに、旭川が人々の暮らしとどのように関わってきたかを感じながら、川に対する想いについて語り合う場として実施しました。

当日、岡山大学理学部前臨時バス停付近に全員が集合し、9時10分にバスに乗車し出発した。

バスの中では、上橋調査設計課長による挨拶、見学会の目的、予定の説明、参加者の紹介に続き、見学地先である建部町の紹介ビデオを鑑賞した。途中、バスで通過する御津町の歴史・文化についての紹介を加え約40分かけて建部町へと到着した。

見学会は、建部町中田の『高瀬舟発着場跡(大手ノ市)』に始まり、明治の面影を残す、建部新町の『古い町並み』、県下でもめずらしい『水害記念塔』、古人の知恵を感じることができる『建部井堰』、川と人との関わりを感じることができる『潜水橋付近』を見学し、サンタケベにて昼食。その後、自由時間に『やはたの里』を見学し、午前中の見学会の行程を終了した。

午前中の見学会は、説明時間、移動時間を含め、行程通り、順調に実施することができた。

### 5 2 . 交流会

交流会は、地元の神原さん、宮内さんを講師として招き、建部町文化センター「法寿庵」にて予定通り、13時30分より開始した。

神原さんには、午前中からの見学会に引き続き、「歴史」「災害」をテーマに地元の方の視点から様々な話をしていただいた。

続いて、宮内さんには、旭川流域ネットワークでの源流の碑の建立の取り組みを中心に話をしていただいた。

参加者の感想・意見について紹介すると、「いつも見ている下流域の旭川とは違った趣きを感じた。」「新しく知ることが多くて大変勉強になった。」「建部新町について、興味深かった。」「建部井堰について、多くのことを学んだ。」「交流会の場所・方法がとてもよかった。」などの感想・意見を頂いた。

見学会・交流会を通じて、各参加者が旭川への想いを語り合いながらほぼ予定通りに一日の行程を終了した。

6. 議事及び状況写真

		見学会での説明・質疑等
はじめに	<p><b>神原さんの紹介</b></p> <p>神原さんは岡山大学の教育学部をご卒業後、小学校の先生をされ、その後岡山県の教育委員会の文化課に8年間。その後大学に勤められた後、町史の編さんなどに携わる。昨年退職後、地元の方や子どもたちに歴史・文化を教えておられる。</p>	 <p>神原さんの紹介</p>
高瀬舟発着場跡（大手ノ市） 神原さん	<p><b>堤防にて説明</b></p> <p>今、立っているこの地は、岡山藩主家老の建部池田氏が、美作との国境に目を光らせるために、1650年（慶安3）あるとき、突然できた陣屋町である。陣屋町には、侍屋敷が20軒程度、その外側に建部新町と言われる商人町ができ、全部で60軒余りの町である。</p> <p>この陣屋町には、生活に必要な物資を岡山から運んだり、岡山に積み出したりする高瀬舟の発着場が付けられた。その場所は、川の背にあたり、流れがきつく、常時、高瀬舟を係留できないため、実際の川港は、ここから300m下流の西原というところにあった。つまり、荷物を積み下ろしのときだけ、ここに舟が来ていたということになる。</p> <p>船着き場の特徴として、石を組んで造った波止めがある。全部で4箇所あり、波止めの間の3箇所が船着き場であった。しかし、度々の洪水や河川改修のため、ほとんど当時の形を残していない。見学する場所は、その面影だけを見て頂きたい。</p> <p>また、この堤防も昭和50年代に河川改修で、かさ上げをしたため、この町の西半分は残っているが、東半分は立ち退きになり、町家もわずかしか残っていないため、町並み保存の申請も許可がされない状況である。</p> <p>それからもう一つ、南方にこんもりとした森がある。昔は金川から山越えしてこの地に下りた場所にお宮があったが、原っぱにできた建部新町の目隠しに、そのお宮を移転し、周囲にエノキなどの木を植えさせた。また、西方には、龍淵寺という寺があり、ここにもエノキを植えてこの陣屋町の見通しを殺していた。</p> <p><b>舟着き場の説明</b></p> <p>学生の頃、研究で高瀬舟の舟数や発着場の数を数えたことがある。私は福渡に住んでいたこともあり、左岸側の作州側ばかり数えていたら、先生に右岸側にも池田家の舟や船着き場があると言われた経験がある。そして、また数え直した。ここは研究者にとっても泣かされた場所でもある。</p> <p>舟の種類には、「高瀬舟」「屋形舟」「渡し舟」「砂利舟」というのがあり、この4つが大きな舟である。あとは、川漁や山の草刈に向かうために乗る「のう舟」があり、舟の需要はかなり多かった。</p>	 <p>堤防にて説明</p>  <p>パネルで船着き場を説明</p>  <p>大手ノ市の波止め (出典：『建部町史』 民俗編)</p>  <p>船着き場から眺める中吉橋</p>  <p>波止めの面影を見学</p>  <p>大手ノ市の説明を聞く様子</p>  <p>大手ノ市の説明を聞く様子</p>



担当

見学会での説明・質疑等

高瀬舟発着場跡（大手ノ市）

神原さん

### 川舟の作業場の説明

ここは、山元さんが生前に川舟を造られていた作業場である。左手側が作業場、こちらが資材置き場。まだ、板がたくさんあり、3、40ぐらいは舟が造れる。壊れた舟も置いてあるが、こういう舟をつぎはぎしながらまた修理する。そういう舟の方が軽く、操船し易いといわれ、人気が高い。もっとも、値段が安いことも魅力である。舟を造る板は3年ぐらい置いたものを使う。道具も一式残っており、町の無形文化財に指定されたが、昨年亡くなられ現在では、解除されている。



作業場を紹介



作業場内を見学



壊れた木造舟

古い町並み（中田地区）

神原さん

### 古い町並みの説明

パネル「建部陣屋及び建部新町の古地図」を示しながら説明

今、立っている場所は、この鍵の手（右図参照）である。見通しを殺すためにこのような工夫がなされている。現在町家が残っている場所は、江戸時代には、11軒（右図参照）あるが、6軒ほどの人が土地を買いなおして大きい町を明治の初めに造った。これが、今面影として残っている。

そこの電柱からここまでが、1軒のお医者さん。こちらがお医者さんの本宅で、こちらが診療所である。元々は、建部池田氏のお抱えのお医者さん。ここが油屋さん。向こうが、紙の油屋さん。こっちは醤油屋さん。そういう油屋や醤油屋のお店が昔はあった。聞いた話によると、明治10年・15年～20年の間に建てたものである。

ある日突然町ができたが、池田氏や家臣は次第に岡山城下町に暮らすようになり、24軒に侍が居たが、幕末には、11軒しか残っていなかった。明治になり、侍屋敷や陣屋をつぶして元の田んぼに戻した。



建部陣屋及び建部新町の古地図



鍵の手で説明を聞く様子



町並みを見学する様子

家屋の特徴として、軒には竹細工の彫り物がある。普通の家屋なら、ひじ木であるが、日よけの袖壁（うだつ）として、江戸時代の面影を残している。



江戸時代の面影を残す竹細工

担当	見学会での説明・質疑等	
古い町並み（中田地区） 神原さん	<p>それから、陣屋から町家に出るところに、大手門という門（前頁参照）があったが、このお宅が、買い取って移築したものがここに残っている。現在では、この家に住んでいる人は居ないため、倒す計画や町からは残してほしいとの希望があり、相談している途中である。</p> <p>また、この辺りから東側が町であるが、今田んぼになっているところが、武家屋敷で、ここが一番低いところである。大水がでると一番に浸かるところが侍屋敷と珍しい場所である。殿様が住んでいたところは、もう少し西側になり、元々田んぼであったため、今ではその一等地がほとんど低い田んぼに返っている。</p>	  
バス移動中 神原さん	<p><b>陣屋町を通過中</b></p> <p>今、バスで通りかかるここがちょうど、陣屋の跡である。陣屋と侍屋敷の間に店が並んでいた。ここ建部町の「建部」は倭建命（古事記表記：読みは「やまとたけるのみこと」）の「建」である。御名代（大名を敬った言い方：読みは「みなしろ」）の地である。それだけに、古墳も建部町だけで、135もある。昔、町史を作るのに、山を全部歩いた。</p> <p><b>中吉橋を通過中</b></p> <p>この辺りは川の漁が盛であり、今、そこに見える垣が、ズワイガニの縄張りをしているものである。川全体を垣で堰き止めて、藩の許可がないとできなかった。</p> <p><b>白石城付近を通過中</b></p> <p>ここは、建部の大田白石というところで、仁堀へ行く道がこれである。ここへこんもりした山があり、これが白石城である。</p>	
宮地神社の水害記念塔 神原さん	<p><b>お宮について説明</b></p> <p>これが宮地神社というお宮である。お宮というのは、本当は本殿の後ろにあって、その前に、人が集まる拝殿である。神様を呼ぶ場所を高いところに造るため、拝む場所を広く造る必要がある。そのため、現在では、拝殿が大きくなり、本殿が見えなくなるというおもしろい造りになっている。どこのお宮に行っても同様である。</p> <p><b>水害記念塔について説明</b></p> <p>ここも、昭和9年の大水で、鉄橋から東側が全部浸かった。この辺りも軒というか、腰板を打ってる高さが大体全部水で浸かった。このお宮もそのときに流された。そこで、破損した本殿を修復する際に、鳥居を造ろうということになった。しかし、鳥居を造る際に、石柱を掘り損ねたため、それを生かして「水害記念塔」が造られた。柱には、昭和9年の浸水線が刻まれている。</p> <p>お宮の客殿もコンクリートと白壁の境に線が1本入っていた。それが、ここまで浸かったという印、記念ものである。</p>	 

宮地神社の水害記念塔  
神原さん

**題目碑について説明**

ついでに、川の方を見ると、日蓮宗の題目碑がある。安芸の国に行くと真宗が多く、備前は南無妙法蓮華経が多い。題目碑は「私の村は日蓮宗です」という意志表示のための物である。建部町には、約84の題目碑がある。  
それから、この地は山がないところなので、お墓はすべて、あいう土手の、自然堤防のところにある。これもおもしろい特徴である。



バス移動中  
神原さん

**旭川に架かる橋について説明**

この橋（大宮橋）も昔は、土橋だったが、改良されて大きくなった。私が子どもの頃は大田渡しという渡し場であった。金川の大橋を過ぎたら、次が鹿瀬橋、それから福渡の八幡橋、その次は、ずっと上流の江与味橋、旦土橋。終戦までは、それだけであった。

昭和9年の大水のときには、鉄橋は7つ橋桁が架かっているが、東から2本が残り、あとの5本は流れた。今見える、丸くセメントでできている橋脚は、新しく昭和9年水害後に直したものである。

**福渡の町について説明**

ここが船番所の跡である。ここは美作の国の船番所。ここから対岸の山が高いところに阿弥陀様を御祭りしているところがある。そこへ行くと、こちらが津山往来が山越した折の真正面にあたる場所である。

**高瀬舟について説明**

この辺り（久具周辺）は高瀬舟が大変苦勞する場所である。川を上げるときには、「彼岸から彼岸まで」といって田んぼに水を上げる3月から9月までは舟は通らなかった。大体10月から翌年の3月までが最も働き手が要る時期であった。この辺りで舟を引き上げるのは久具の農家の人であった。冬場仕事がない時に山で炭をつくったり、薪をつくって岡山の高瀬舟の荷を作っていた。高瀬舟を引っ張るのは各地域ごとに、今で言うフランチャイズで引っ張っていた。舟は流れが緩いところでは、自力で登り、急なところは、農家の人に請け負ってもらって登る。

建部井堰  
神原さん

**建部井堰を対岸の堤防から眺めながら説明**

この建部井堰は、ずうっと斜めに極力、川の流に逆らわないように、515m堤防がある。この堰により取水する用水は、延長約6,000mで150ヘクタールの田んぼを養っている。

江戸時代の承応3年、ちょうど光政が岡山に入ってきたときに、大洪水があった。そのため、建部の池はすべて壊れたため、用水が造られた。

大正時代になって、今度は、（旧）御津町の鹿瀬というところでも水が足りなく、建部から水を分けてもらえないかということで、3000m延伸して6000mになった。

用水の名前には、色々な呼び名がある。この土地が「一の口」というところなので、「一の口用水」。それから、建部では大きい井出から水がでるので、「大出用水」。それから、水の恩恵を受ける宮地村、市場村、中田村、西原村が5つあるので、「五箇用水」ともいう。



担当		見学会での説明・質疑等	
建部井堰	神原さん	<p>建部井堰を造ったのは、熊沢藩山とも津田永忠とも伝えられている。ただし、年代を考えると、用水ができたころは、永忠は25歳。18歳ごろから、光政について参勤交代で江戸へ行ったり、帰ったりを6回繰り返していたので、その最中に工事に直接は関われないだろうと推測される。</p> <p><b>川口地区について説明</b></p> <p>ここには、川口という集落がある。そこは美作側。向こうにある青い屋根がある付近が水源池である。その付近に見える2階建ての瓦が、江戸時代には天領になっていた。兵庫県の龍野藩の預かり地になって、その2万石分ほどの米がここに集まっていた。その米を高瀬舟で積み出して大阪の市場へ売る。そのお金を幕府へ納めるといことがされていた。</p>	 <p>対岸の堤防で説明を聞(様子)</p>  <p>建部井堰(対岸からの様子)</p>
	名倉委員	井堰の取り入れ口のところは、工事のときどうなるのか。締切りはないのか。	
	神原さん	<p>樋門が今はある。樋門があって、そこから斜めに降りていくと平らな場所があり、4mぐらいのものがある。水気がないときは、何本かの丸太を置いて、逆に水が不要なときは、丸太を上げる。そのときには、竹で編んだ簾を入れると、魚が取れた。取れた魚は村にくばられ貴重なたんぱく源であった。</p> <p>今立ってるところは堤防であるが、あまり洪水で水をこしたことはない。昭和に入ってから9年と20年に越したただけである。その前には、明治26年、32年。合計4回越している。</p>	 <p>建部井堰の樋門</p>
	事務局	平成10年は越していないのか。	
バス移動中	神原さん	そばまでは来たが、越してはいない。あまり知られていないが、昭和20年が大きい。戦後の混乱のなかで、記録がいいようにとれていないのが原因である。記憶では、9年と50cm程しか変わらない。	 <p>洪水の話をする様子</p>
	神原さん	<p><b>建部町について説明</b></p> <p>今、建部町は、「桜と温泉の町」というのが、キャッチフレーズで観光立町をうたっている。10年ほど前は、何軒も温泉があったが、今は、サンタケベが一つだけになっている。もう一つ国際温泉会館というのがあり、国際ヴィラを兼ねている施設がある。昔は温泉宿など、事業を起こした人が多かったが、時代の流れとともに、だんだんと姿を消してきている。</p>	

担当

見学会での説明・質疑等

### 鉄橋の修復について説明

昭和9年の洪水で鉄橋が流されたときには、千葉の鉄道聯隊500人が復旧にあたり、流れた橋桁を1本は大宮橋のところまで、もう1本は吉田という4km下流まで流れていたのを、トロッコで引いてまくら木の様な木で組んだ井桁を使って線路を持ち上げた。正味1年ぐらいで復旧した。現在と比較しても非常に大掛かりな工事であったと考えられる。

### 渡し場・橋と町の関わりについて説明

ここから見える、2艘の舟がとまっているところが、津山往来の渡し場であった。対岸からこちらへ渡ってきて、下手のところから、家と家の間が切れており、船番所の家のところへ行き、町へ上がっていった。

上流に見える歩道橋は、昔は、200mほど上流に橋が架かってたが、現在の場所に橋が動くだけでも当時はものすごい反対にあった。

橋を動かすと、汽車に乗るために駅に向かうのに、町の商店街を通る人が減るとして反対された。そして橋ができると、今度は、橋を渡って帰る人が多くなり、昔は家が一軒もなかった橋の付近に店ができた。橋ができて少し動くだけでも、町の商売にも死活問題として影響を及ぼす。橋と人々との関わりも興味深い関係がある。

### 河川交通と町の関わりについて説明

ここは、国境だったため、建部側の見張り場所、福渡側の見張り場所の両方の船番所があった。岡山から上がってくるのに、急ぐ船は大体6時間ぐらいで上がってくるそうである。そのため、新鮮な生の魚が食べられるのが、この町までだったと言われている。ここから上流になると、塩物になる。鯖寿司など。

川に舟が着くと、みんなが集まり、1軒物、2軒物、3軒物といって魚が集まる。なぜかという、魚が3軒離れたところで臭うものは非常に安い。1軒まで近づいても臭わないものは、新しくて高い。そんな笑い話がある。

ここからが親村であるため、子村へ次々物資が分散して行って、市が開かれる場所である。また天領であったため、藩に関係するもの、生活物資などが集散する場所であった。そのため、市場があり、職場がある。また、旭川を下るのに、落合を朝出ると、ここに晩着くため、どうしても建部に一泊することになり、宿屋が多かった。

### 潜水橋について説明

昔の潜水橋は今のものよりも低かった。しかし、最近では、魚釣りや国体のカヌー競技の関係で、少々の水では流れないように改良されたものである。



福渡の鉄橋



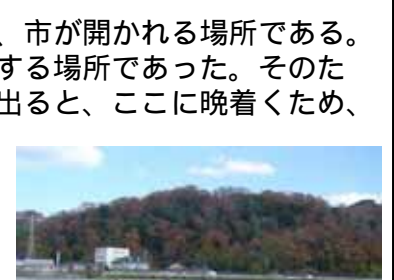
渡し場の説明を聞く様子



河川交通の話聞く様子



昔の町の様子を聞く様子



潜水橋を渡る様子



嵩上げをされた現在の潜水橋

潜水橋

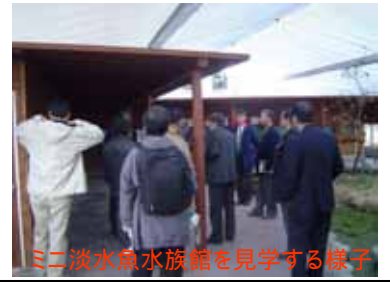
神原さん

担当 見学会での説明・質疑等

やはたの里

サンタケベの昼食後、自由時間として、やはたの里を見学。旭川中流域に生息する川魚を見学し、美しい川に対する想いを感じた。

(当日は、火曜日のため本来ならば休館日であったが、神原氏のご協力とめだかの学校のご好意により特別に開館していただいた。)



ミニ淡水魚水族館を見学する様子

交流会 神原さん

建部に伝わる話について

昔、大水が原因で岡山藩にお金が足らなくなった時に、江戸から10万両借りたり、蔵米をみんなに売って飢えを凌いだなどという昔の話は記録として残っている。しかし、建部のような田舎になると、いろいろな記録というものが残っていないことが多い。

先程も井堰のところで、津田永忠が用水を「サゲンタ」と名乗ったところに造ったという伝えが残っているという話をしたが、「サゲンタ」が10歳の頃から、造り始め、20歳の頃に出来たと考えると、その頃はまだ小姓で、江戸と岡山を行き来している頃である。地元の人の間では、永忠が幼名「サゲンタ」の時代に造ったと伝わっているが、本当は大人になってからの名前である。永忠のお父さんの名前が「サゲンタ」というのが証拠である。

地元の話では、「有名な人の名前の方がいいから(永忠ということにしている)。」という話であった。

他にも、建部には和尚人にまつわる物語などいろいろな伝えが残っている。そのため、大水の話も、だんだん誇張されたり、小さくなったりしている部分もある。

水害について

はっきりとした記録が残っていて、子どもの頃に経験者から聞かされた話というのは、明治の一水、二水、明治25、26年の洪水である。その次が昭和9年。

今日、話したように、福渡の鉄橋が7本のうち5本までが落ちたという。それを千葉の鉄道聯隊500人が復旧にあたり、トラック2台分おいて橋桁をその上に載せて、ロープで引っ張って上がったという風に聞いたことがある。

鉄橋流出の記録や、見学した水害記念塔の浸水線の他にも、中田新町でも、醤油屋さんの桶が水に浸かり泥をかぶったため、使い物にならなくなったという話を聞いた。

私の家も八幡橋の近くで、町内で一番高い場所にあるにもかかわらず、くるぶしまで水が来たため、家族で舟で逃げたと聞かされている。そのようにこの建部は度々の洪水を経験した土地である。

川と人々の関わりについて

この土地のお百姓さんは、牛を飼っている。蓄力で百姓をするためである。牛を飼うには餌となる草が必要である。この辺りは田んぼが多く、草があまりないため、百姓は皆、舟を自分で買って、川を渡り、山の草を刈らしてもらおうという暮らしをしていた。そういう風な、山と川と百姓の仕事は切っても切れない関係が昔はあった。



車座での交流会



歴史・水害の話をする神原さん(右)



説明を興味深く聞く懇談会委員

担当

見学会での説明・質疑等

### 河川の整備について

過去の水害として、記録が余り残っていないが、昭和20年9月がある。伊勢湾台風、枕崎台風、室戸台風として代表に挙げられる。岡山県では戦後の混乱のため、ほとんど記録が残っていない。そういう風な水害を繰り返しながら、護岸整備や堤防を高くしたり、コンクリートにしたりすると川の魚はだんだん少なくなっている。またダムができてからは、川に砂が流れなくなった。小学校の先生をしていたころは、子どもたちを川へ連れて行き、流れてくる石で勉強した。ダムができることで、受益は多くあるが、今まであったものが、なくなることもある。それが幸せなことだろうかということを考えることが必要である。

### 旭川に架かる橋について

今は皆何も考えずに橋を渡っているが、昔は、旭川を渡る橋は京橋しかなかった。明治の終わりから大正にかけて、次第に橋が架かり始めた。始めは相生橋。これは、第六高等学校が川の向こうにできて、学生が渡るのに必要だということで、架かった橋である。次は、上流の大原橋まで橋はなかった。それから野々口のところの葛城橋、鹿瀬橋、福渡の八幡橋。そして上流の旭町のところに江与味橋。それから上流5km程に旦土橋。落合町の落合橋。以上が私が戦前から知っている橋である。

### 陸上交通について

明治になってから、津山と岡山を結ぶ県道を金川から高梁の方へ行く道へ入って下田というところから箕地を越して、そして、今日見学した中田新町を通って、旭川を渡るという道筋が昔の津山へ行く道である。

金川からこちらは大水が出るたびに押し流されるために、明治になってから道が付け替えられた。そのため、福渡からも今の川口下区を通る道は明治ではなく、津山から山越をして、福渡へ下りて来る道を使っていた。

### 河川交通について

レジュメの中に高瀬舟に乗った修学旅行生の写真があるが、これは特別なものである。実際、高瀬舟は人を運ばない。特別の藩の代官所の用事がある場合のみ乗ることができ、一般の人は乗れなかった。加えて、高瀬舟は鉄道ができたことが原因で衰退したと言われているが、実際は、上流から来た荷物を、鉄道に載せかえる手間を考えると、非常に大変なことであり、また、京橋での荷さばきのルートは整ってたため、岡山まで舟で運んでいた。けれども、鉄道輸送にかわり、それからバス輸送に変わり時代と共にその姿はなくなっていった。



建部町文化センター(交流会会場)



車座での交流会



車座での交流会

学生(中村さん)

建部新町ではなぜ、土地が低いところが一等地だったのか。



学生からの疑問

交流会

担当		見学会での説明・質疑等
交流会	神原さん	そこに住んでいた人の都合もある。侍屋敷を造ったところは水田化され、整地されていたため、町を造りやすかったことが理由である。
	名合委員	建部には、水防団の組織はあるのか。また、平成10年10月の洪水のときには、組織的に動いたのか。  質問をする名合委員(中央)
	神原さん	水防団と警防団が兼ねてある。実際は迅速な機能は不可能である。洪水は急に起こるため、浸かっていない家の人浸かった家に手伝いにいくなどの、暗黙の約束事がある。地域のつながりのようなものである。
	事務局	中田新町には、明治の水害の記録のようなものは残っていないのか。  事務局からの質問
	神原さん	残っていない。はじめに話したように、醤油屋の樽が浸かったなどの聞いた話程度である。
	事務局	渡し舟の運賃に関する記録は残っていないのか。
	神原さん	村役人が度々代わっていることや、水害が起こっているところなので、建部では残っていない。金川には町史を調べればきちんとした記録が残っている。上流では落合が残っている。落合は川の合流点で、盆地であるため、水に浸からないところに役所があったため、記録がある。
10分間休憩		

= 参考 =

#### 旭川舟運に関する運賃の調べ

##### 渡し船の運賃（旦土、福渡で時間に関係なく渡していた）

明治20年頃 : 2銭 (出典:「高瀬舟」 山室勝之資著)

##### 高瀬舟の運賃

大正5～6年 落合 福渡 : 70～80銭 (出典:「高瀬舟」 山室勝之資著)  
落合 岡山 : 1円位

昭和初期 : 4円 (出典:落合町史 民俗編)

##### 日船（＝高瀬舟に座席を設けて人のみを運ぶ船）の運賃

1人分（津山～西大寺） : 25銭～40銭位 (出典:「高瀬舟」 今井三郎著)  
（ちなみに、当時の中国鉄道の汽車賃：52銭）

金川町史（御津町史）についても調べたが運賃に関する明記はなかった。



担当 見学会での説明・質疑等

事務局

宮内さん（旭川流域ネットワーク）の紹介

旭川流域ネットワークという言葉が出たので、紹介すると、平成9年に河川法が変わり、河川管理の目的に河川関係の整備と保全という言葉が入った。さらに、河川整備をするに当たっては、専門、学識経験の方などの十分な意見を聞くことが重要になった。その交流が始まった最初の活動は、旭川の源流の碑を河口から源流まで運び、多くの人に川に関心を持っていただく活動であり、旭川流域ネットワークである。2人目の講師の宮内さんは、旭川流域ネットワーク中流域の提案のされてる方である。先日の建立の碑の際にも、シンポジウムの司会等されており、今日はその活動を中心にしたお話しを伺う。



事務局から宮内さんの紹介

自己紹介

私は、昭和28年生まれで、幼少の頃から、川や山を相手に遊んでいた。福渡の幼稚園、福渡の中学校、福渡高校を出て、昭和43年に電電公社に入り、それから勤続37年になる。転勤して、山口、広島、中国管内放浪したが、やっぱりこの建部町が一番いいという結論に至った。なぜ、建部町良いかというと、岡山県のほぼ中央に位置し、旭川が横断している。53号線、津山線が走り、南には山陽道、北には縦貫道が走っている。日本海にも、瀬戸内海にも近く、風光明媚で非常に建部町を愛している。



自己紹介する宮内さん

高校生の頃、夏休みには、マッチと醤油と水鉄砲を川へもって行き、あとは、何とか魚をとって河原で、焼いて食べて朝から晩まで過ごした。これが、私と川との関わり方だった。

旭川流域ネットワークの始まり

1999年8月8日に全国川のワークショップがこの会場で開催され、当時建部町にも、自然塾というものがあり、その他、全国で色々な活動があることを知った。それから活動を始めたのが、旭川流域ネットワークである。今年、源流の碑は活動開始から、9年が経ち、9本目になった。私は、7本なので、3本目から参加をしている。源流の碑を運ぶのは、手段であって、その目的は、山をきれいしに、その結果、川をきれいにしたり、川を守っていく人たちを育てようという活動を未来永劫まで伝承することである。



旭川流域ネットワークの取り組みの記録

先ほど私の紹介の中で「中流域」という言葉があったが、中流域の範囲は、旧御津町、建部町、久米南町、旧中央町、旭町、加茂川町、賀陽町の7町。

中流域の一番の思い出は、文字文化がないことである。インターネット環境もなく、文字に残そうという考えもなく、ファックスもない。想いを伝えたり、あるいは連絡など非常に苦労した7年間だった。



宮内さんの話を興味深く聞く様子



交流会

宮内さん

担当		見学会での説明・質疑等
交流会	宮内さん	<p><b>源流の碑の活動</b></p> <p>一昨年に加茂川町に最初の1本、今年は旧旭町の江与味、大山川へ2本目が建った。今年の江与味の皆さんは、平均年齢64歳のすてきなおじいちゃん、おばあちゃんだが、「我々の川を見る。ごみ一つない」と言われていた。本当にきれいな川であった。去年の12月、原木を切るときから一生懸命されていた。そのような姿を見て、私もがんばろうと今年は新記録の下流から久米南まで歩いた。</p> <p><b>旭川シンポジウムの紹介</b></p> <p>H17年19、20日に行なわれた旭川シンポジウムで討議された内容を紹介する。</p> <p>「川を守ることは、森を守ることなんだ、川を守ることは暮らしを守ることなんだ。」、「間伐をしたいが、人手がなくできない。しかし、仕事ができなくなるまで、山を守っていきたい。」、「ダムのばっきでアユが育たなくなってきた。」など。</p> <p>旭川中流域の事務局長の話では、以前行った、モンゴルから日本を見ると、日本は本当に緑豊かな国であると。モンゴルでは、子どもたちを夏休み1ヶ月くらい草原に住まわせるとのことである。日本でも夏休みの何ヶ月、何週間は森林の方で教育したらどうかという話があった。</p> <p>最後に、「本気ですると大抵のことはできる。本気でするとおもしろくなる。本気でしていると誰かが助けてくれる」これを実践して、今学んだのが、今回の源流の碑のリレーだった。</p>
	事務局	リアカーの話をしていただきたい。
	宮内さん	環境に優しい人力で、人と人がいろんな川を見ながら、自然を見ながら、語りながら、汗流しながら行こうというのがリアカーを使う目的である。車で運ぶのではなく、人と人のつながりができる。
	神原さん	建部町は、もともと青年団活動にキャラバン隊という活動があった。いろんなところを巡回して伝承していく。そういう基盤ができていた土地なのかもしれない。
	名合委員	素朴な質問で、リアカーを引いたあとは、どうやって帰ってくるのか。
	宮内さん	着いた先で必ず交流懇親会を開いている。その後は、分担でなんとかしている。そういうのも人と人のつながりができている。この活動をやって、岡山県のすばらしさを再認識できた。
	神原さん	へき地だからこそ魅力がある。
	宮内さん	学生さんはこれから、将来成人して社会人になったときに、へき地はへき地の良さが見えるか、へき地はどうでもいいと見るか、その辺が大事なところだと思う。
	宮内さん	先日の山陽新聞に川口地区で、川の清掃をやって、その後、焼肉パーティーをしたという記事が載っていた。近くでそういう活動が行なわれ世代間の交流がなされているんだと感じた。そういう人たちと合同でいろんなことに取り組めたらと思う。

担当	見学会での説明・質疑等	
学生 (石井さん)	外にあるのが高瀬舟か。	 <p>質問をする学生</p>
神原さん	高瀬舟と同じ大きさだが、構造的には高瀬舟と違い屋形船である。これは重すぎて、操船ができない。もっとも操船技術も継承していない。	
学生 (川上さん)	川を中心とした町の文化とか歴史などを見て、いつもと違う視点からいるんなことが見えて、大変勉強になった。	 <p>感想を語る学生</p>
学生 (南澤さん)	町の歴史などを説明していただき、建部町の町の雰囲気を感じることができた。	 <p>感想を語る学生</p>
学生 (中村さん)	大学の部活動で、三野浄水場付近で練習をすることがある。その旭川のイメージが強かったが、建部町に来て、中流域の大変きれいな川を見て、旭川の違った一面を見ることができた。	 <p>感想を語る学生</p>
久野委員	<p>教わったことが多かった。「豊かな」生活をされている印象を受けた。そのおかげで魅力的な話ができると思う。机上の空論ではなくもっと地場に根差した話を聞くことができた。</p> <p>印象的だったのは、人工的にできた陣屋町。人工的に突如できた町は権力がなくなるとすぐに廃れてしまうというあり方を印象的に感じた。</p> <p>建部町にとっての旭川は、一体化の役割なのか、阻害要因なのか。</p>	
宮内さん	不自由な面もあるが、今は一体化に役立っているのではないか。	
久野委員	川と人との関わりも江戸時代・明治そして今とでは随分変わってきているのだと感じた。もう一点、木材の話はないのか。	
神原さん	<p>筏は昭和20年以降も下っていた。ダムができるまでは。その他、竹筏があった。筏は落合・勝山よりも建部の方が盛んであった。落合から半分の労力で岡山まで着くため、運賃が安かった。</p> <p>そういう子どもの頃見た筏は、戦時中にガソリンがなくなったために、復活したものかも知れない。子どものころ見た筏は、七輪を積んで、鍋や飯を炊きながら下り、帰りは積んでいた自転車で帰るといったものであった。江戸時代の記録は残っていない。</p>	

交流会

担当		見学会での説明・質疑等	
交流会	内田委員	<p>大変興味深い話であった。古い町並みの存在は知っていたが、それが、江戸時代のものでないということを知った。また、陣屋町が、近世の始めに突然できたというのも興味深かった。地理を専門としているため、陣屋町、都市計画など、なるほどと思うところが多かった。</p> <p>それと、あんなに古い時代の堰が残っているということも、知らなかった。今日は発見が多かった。</p>	 <p>感想を語る内田委員</p>
	名合委員	<p>新しいことを随分教わった。特に取水堰は始めて知った。この町に来て、水路がいっぱいあり、水がすごくきれいであるということに気がつき、堰を見学した際に、ここから取水し、町の中全体に流れているのだと気がついた。</p> <p>町と川、あるいは町と水と人进行を考えると、町の中にきれいな水が流れているというのは、非常にいいことだと思う。豊かな感性が育つには重要なことである。</p> <p>建部町を見ていると、川あるいは水に関してまったく問題がないような気がした。ある程度大きな町では、コンクリート護岸・堤防への植栽・水質などの問題がある。今後、人口集中した都市での川と人の関わりをどうすればよいのかということを考える。</p>	 <p>感想を語る名合委員</p>
	田中委員	<p>建部には、昔、めだかの学校やたけへの森へ行ったことがある程度であった。今日見学会を通じて、面白いところであると感じた。水・川を通じて、いろんな生活が時代とともに、人と関わりがあったということを実感できた。</p> <p>さらに、それらを守ろうという働きが若い人にも伝わって、みんなで守っていかれたらと思った。</p> <p>今日は、見晴らしもよく、川のそばで一番適した場所での輪になっての話、非常にいいことだと感じた。</p>	 <p>感想を語る田中委員(中央)</p>
	宇佐美委員	<p>最も興味深かったのは、建部井堰であった。昔の人の知恵というのは、大したもの、現代の重機などが無い時代に、あれだけのものを人力だけで造り上げる知恵というのはすごいものであると感じた。</p> <p>考え方としては、重機などがあるばかりに、いろんなものをねじ伏せようとする発想が強くなるのではないかと思う。昔は、ねじ伏せるのではなく、その中でうまく、折り合いをつけて利用するという発想のなかでやってきていたのではないか。非常に今日は楽しい一日であった。</p>	 <p>感想を語る宇佐美委員(中央)</p>
	名合委員	下水道の整備はどうなっているのか。	
	さん 神原	60%整備されている。合併層でやっている。	
	さん 神原	先ほど、水がきれいという意見があったが、以前に比べると、カビ臭い。私は、井戸水を飲み水に使って、洗濯、台所の洗い物に水道水を使っている。	
	さん 宮内	国体選手は、カヌーの練習中にきれいだが、臭いと言っていた。ばっきをやりだして、余計に感じた。	
事務局	本日は、非常に興味深い話を楽しく聞かせていただいた。感謝の意味を込めて2人にもう一度大きな拍手を。		